



ティーチング・ポートフォリオ



佐賀大学 文化教育学部

地域・生活文化講座

山下宗利

Sep. 18, 2009

もくじ

1) 教育の責任	1
2) 教育の理念と戦略	3
3) 授業改善に向けた取り組み	6
4) 学生による授業評価	8
5) 学生の学習成果を示す根拠	9
6) 今後の教育目標	10

添付資料

- 1：地理に対する学生のイメージ
- 2：地理学フィールドワーク実習の実施一覧
- 3：沖縄県渡嘉敷島地理学フィールドワーク実習の要項
- 4：渡嘉敷村阿波連の土地利用図（2009年）
- 5：都市システム論レポート例
- 6：学生への配布資料
- 7：「学生による授業評価アンケート」結果
- 8：授業に対する学生の自由記述コメント
- 9：学生の学習成果「フィールドワークが生徒に及ぼす影響 -中学校社会科単元「身近な地域を調べよう」を事例に-

佐賀大学ティーチング・ポートフォリオWS

2008年9月16日～18日

博多グリーンホテル2

メンター：栗田佳代子・尾澤重知・皆本晃弥

1) 教育の責任

本学におけるわたしの教育に関する責任は、人文地理学に関する科目を文化教育学部および大学院（教育学研究科（修士課程）と工学系研究科（博士課程））の学生に教えることである。受講学生の中には、将来教壇に立とうという夢を抱く学生もいる。わたしの担当授業科目のいくつかは小・中学校の社会科や高等学校の地理歴史科の教員免許に必要な科目に指定されている。そのため、将来の教員には地理の本質を学び、それを子どもたちに教えていただきたい、という強い希望を抱いている。また専門の人文地理学以外に、情報処理科目と大学入門科目を担当する責任も有している。

佐賀大学での担当授業科目は以下のとおりである。

全学教育科目

科目番号	科目名（対象学年）	特記事項（カリキュラムにおける位置づけ）
99102100	情報基礎演習 I（1年）	美術・工芸課程向けの演習である。美術分野の才能に長けた学生が対象であり、かれらの興味をいかに引き出すかに苦心している。
90100500	大学入門科目（1年）	人間環境課程地域・生活文化分野向けの科目である。地域・生活文化講座教員によるオムニバス方式で実施

文化教育学部専門科目

科目番号	科目名（対象学年）	特記事項（カリキュラムにおける位置づけ）
13070000	小学社会（2年）	小学校の教材を多く取り入れ、地理の苦手意識を克服することが目標である。学校教育課程の必修科目
19100000	日本の地理と風土（1年）	地理的見方・考え方を中心に地理学の基本を学び、高等学校段階とはひと味違った地理学の面白さを理解することを目標とする。地域・生活文化分野の必修科目
19040000	情報処理演習 I（1年）	初心者を対象として、パソコンを用いてプレゼンテーションと統計処理を中心とした実習をおこなう。地域・生活文化分野の必修科目
19480000	都市システム論（3年）	佐賀市中心市街地を取り巻く地方的特殊性（地域環境）を考慮し、佐賀独自の活性化に結びつく方策を見いだすことを目標とする。学生自身の現地調査レポートを課す。選択科目、地域創成教育プログラムの一つ
19481000	地理情報システム演習 I（3年）	GISに関する基礎の理解とコンピュータを用いた課題によるGIS操作の基本的技術の習得を目的とする。
19482000	地理情報システム演習 II（3年）	同演習 I の基本をふまえた上で応用課題に取り組む。GISを用いて佐賀市中心市街地における現状分析と政策立案を目標とし、データ

		の入力から分析、結果出力までの一連の課題を各自が設定し、最後にプレゼンテーションをおこなう。
19505000	地理学フィールドワーク実習（3年）	地理学の最も基本的な野外調査法である、土地利用調査の方法を習得する。また、各種データの収集や聞き取りなどの手法を習得する。地域や自然環境、環境問題、フィールドワークに強い関心があり、自ら野外実習を企画・遂行する行動力を有している学生を対象とする。夏期休業中に実施
19651000	人文地理学演習（3年）	主に地理学分野の卒業研究をおこなう学生を対象に、データの収集方法、分析方法、論文のまとめ方といった基本的な能力の育成を目指す。3年生は既往研究を論文紹介し、4年生は各自の卒業研究の中間報告をおこなう。
	卒業研究（4年）	卒業論文の作成を指導する。

教育学研究科科目

科目番号	科目名（対象学年）	特記事項（カリキュラムにおける位置づけ）
48217100	地理学特論 AI（修士1年）	地域事象を地理学的手法を用いて理解するための考え方を習得し、具体的な地域を取り上げて多面的に分析・考察する能力を育成することを目的とする。
48220100	地理学特論 AII（修士1年）	修士論文作成を目標とした専門的な講義である。修士論文を地理的分野で作成する専修生を対象とする。
48219100	地理学特別演習 A（修士1年）	人文地理学的事象のフィールドワークやデータの収集方法、そして問題提起・分析方法、論文のまとめ方などを習得する。
48251000	社会科課題研究（社会・地歴）（修士2年）	修士論文の作成を指導する。

工学系研究科科目

科目番号	科目名（対象学年）	特記事項（カリキュラムにおける位置づけ）
	地理学特論（博士後期1年）	地理学の研究動向を追い、博士論文の作成を指導する。

2) 教育の理念と戦略

・ 地理≠暗記科目

大学入学以前の授業（大学入試を含む）としての「地理」は暗記科目である、という観念が多く、多くの学生に刷り込まれている。1年生対象の必修科目「日本の地理と風土」の最初に、「今まで学んできた地理の授業に関して嫌いな点を自由に記してください」というアンケートをおこなうと、「地理は暗記科目である、歴史は時間の流れがありストーリーがあるのに地理は何を学んでいるのかわからない、いくら覚えてもきりが無い、理系のおいがする」といった回答（添付資料1）が毎年のように寄せられる。これらの多くは、地名や山脈・河川名、首都名、主要な資源・農産物の生産国などを問いかける地理のテストに由来していると考えられる。デトロイト＝自動車産業といった地名と物産名を短絡する、いわゆる「穴埋め問題」への学生の素直な拒否反応であろう。しかし学生が学んできたこれらの地理的事象（「地方的特殊性」という）は地理的見方・考え方の一つに過ぎない。つまり、地理学の本質を学んでこなかったことが学生の地理への意識に悪影響を及ぼしているのではないかと考える。地理の面白さは、事象の分布以外に、なぜそのように分布しているのかといった要因や背景を探り、その地方でのみ生じている現象なのか、それとも何らかの一般的共通性が存在するのか、さらに他の事象との間にどのような複雑な関係（重層構造）があるのか、そして将来どのように変化するのか（予測）、などをさまざまな他の要素とともに分析・考察するところにある。

・ 楽しい地理授業の創造

わたしの所属している文化教育学部では教員養成が一つの重要な柱になっている。将来の教員には地理＝暗記科目という固定観念を次世代の子どもたちに植え付けるような授業をしてほしくなく、学んで楽しい地理の授業を展開してもらいたいと願っている。また学生自身も楽しい地理の授業を展開したいと願っているに違いない。この点において地理を担当する重要な責務を負っており、地理学の本質を教えたい。

・ 地域への愛着心

地理を学ぶことの意味を検討したい。わたしたちの生活空間は郊外化が著しく進展し、郊外の大型のショッピングモールが買物などの核になりつつある。それに対して中心市街地の疲弊は止むところを知らない。その結果、まちの顔としての中心市街地ではシャッターが下ろされ、一方の郊外やバイパス沿いでは大型集客施設が立地し、全国どこでも同じ顔を持つようになってしまった。この中心市街地の衰退現象が象徴しているが、身近な地域への愛着が薄れてきたことも中心市街地の衰退に影響しているように思わ

れる。身近な地域に眼を向け、どのような変化が生じつつあり、身近な地域をどのようにしたいのか、といった点にもっと関心を払うべきであると考え。特に自らの五感を通して地域の現状を把握することはとても有意義なことである。地理を学ぶことによって地域への愛着心が芽生えるのである。

ではどのようにすればこれまでの地理に対する観念を打ち破ることができるだろうか。それは、次の2点が重要であり、とりわけ地理学の原点に戻ること、すなわちフィールドで考えることが最も効果が大きいと考える。

教室を出てフィールドワークで考える

野外調査であるフィールドワークは地理学の基本である。「フィールドが実験室である」とも言われる。地域に足を踏み出してじっくり観察すれば、そこには今まで気づかなかった多くのものとの出会いがある。なぜここに水田が広がっているのだろうか？水をどこから引いているのだろうか？地形と関係があるだろうか？気候との関係は？などさまざまな疑問に出くわす。現地を訪れて土地利用図を作成し、五感をフルに働かせて事象を観察し、分析・考察することによって、教室での授業では見えてこなかった事実が浮かび上がってくるのである。これこそ地理学の醍醐味である。これをぜひ経験してもらいたい。さらには地域への関心や古くからの伝統に対する誇りを抱くことが可能となる。わたしの授業科目「地理学フィールドワーク実習」は野外実習そのものであるが、他のほぼすべての授業科目においても学生にフィールドに出ることを強く促している。フィールドで考えることの重要性を今後も指導していきたい。

教科書・プリント以外のさまざまな映像資料の活用

教科書を中心とした授業形態では、現在のインターネットに慣れ親しんだ学生には物足りなさが存在するようだ。わたしの授業、とくに世界の諸事象を扱う場合には、映像資料の活用が欠かせない。そのため、高校までの地理では扱わない内容を、映像やパソコンを活用することにより、地理学への興味関心を引き起こす授業展開を心がけている。この場合も単なる地名物産の羅列にならないような工夫が必要であり、できるかぎり経験談を学生に紹介するよう努めている。こうすることでより身近な問題として地域の諸事象を捉えることができると考える。

3) 授業改善に向けた取り組み

ここではわたしの授業改善に向けた取り組みの一部をご紹介したい。フィールドワークをはじめ、学生への指導をどのようにデザインして授業に取り入れているかを述べ、これらを共有する機会を持つことができれば幸いである。

・地理学フィールドワーク実習

上述したように、わたしは地理学のフィールドワークを重要視している。フィールドワークを実施することによって新たな発見や驚き生まれ、退屈で苦痛を伴う授業から楽しい授業に変貌させることが可能だと考えている。

この科目は学部の3年生以上を対象に毎年夏期休業中におこなっている学外集中授業である(添付資料2)。2009年度の実習は(添付資料3)に示すように、9月7日(月)から11日(金)までの4泊5日の行程で、8名の学生(うち男子5名)とともに沖縄県渡嘉敷島を訪れた。藤永 豪准教授にも参加していただき、協力を得ることができた。責任者として最も注意しなければならない点は事故のない安全な実習である。わたし1人では8名の受講生すべてに気を配ることができないため、藤永准教授の応援を得たのである。また5月25日に第1回目のオリエンテーションを実施し、実習内容についての説明をおこなって事前学習をするとともに、沖縄までの交通費が嵩むため早めの航空券の確保などを指示した。

今回の実習のメインは渡嘉敷島阿波連での集落調査である。那覇の沖縄県立図書館で予め新旧の住宅地図を収集し、これらを張り合わせて土地利用調査用原図を作製した。3名ないし2名1組のグループを作り、阿波連集落で土地利用調査をまる1日実施した。はじめに土地利用調査の方法を実地指導し、わたしたち教員も学生の活動を見守りながら調査を進めた。学生へは、観察したものはすべて調査用地図に書き込むとともに、なぜそれらがそこにあるのかを考えながら調査を進め、できる限り地元の人々に話しかけて疑問点を尋ねることを指示した。土地利用調査後に宿舎に戻り、どのような事象が数多く観察できたか、阿波連集落を特徴づける利用は何であったかなど、学生間で話し合った。土地利用図の凡例項目を決定した後、共同で色鉛筆を用いて彩色し、添付資料4に示す1枚の土地利用図を作成した。完成した土地利用図を基に全員で討論をおこない、阿波連集落の地理的特色を考察した。ここに示した現地調査の方法は地理学の最も基本的な手法であり、上述の地理的見方・考え方を修得する最善策と位置付けられる。

・都市システム論

この授業科目は変化の著しい現代の都市を地理学的な立場から解説し、具体的事例を基にして都市の現状を把握することを目標としている。なかでも「佐賀市中心市街地の活性化」を主要テーマとして取り上げ、佐賀市中心市街地のおかれている現状や郊外型

大型店の出店規制、都市計画との関係を詳細に解説している。本授業においてもフィールド、すなわち中心市街地へ学生自身が出向き、なぜ中心市街地の衰退が生じているかを学生の視点から考察させている。レポートの一部は添付資料5に示した。

・ 地理情報システム演習 I・II

伝統的な地理学に加えて、近年では地理学においても研究・教育現場へのコンピュータの導入が急速に進んできている。その一つが GIS (Geographical Information System) である。これはコンピュータ上で地図データとデータベースを組み合わせたもので、表示・分析する高度な機能を有している。GIS を導入することにより、地図上で分析していたこれまでの方法に代わって、コンピュータ上で分析が瞬時になされるという利点が生まれた。さらにさまざまな事象の組み合わせ分析が可能となり、従来とはまったく異なった視点からの分析が可能となり、あたらしい知見が提出されるようになった。

わたしの授業科目「地理情報システム演習 I・II」では GIS の基本的な分析を取り入れることにより、伝統的な地理学に新しい潮流があることを学生に教えている。欧米諸国では GIS は中学校段階から導入されており、日本の地理教育もいずれこの変化の波を受けると考え、学生に最新の地理学分析手法を学んでもらいたいとの希望を有している。

GIS 分析をおこなうにあたり、分析対象となる GIS データが必須となってくる。しかし GIS データは高額であるため、わたしの研究データ（東京都都市計画局作成「東京都 GIS データ」）を用いて実習をおこなっている。実施にあたっては週末の空き時間を利用した集中形式の実習をおこなうことにより、GIS 操作の連続性を保つように工夫している。また卒業研究に際しては、学生自身が GIS データを作成する場合もあり、データ作成の手助けをしている。

・ 大学院教育実習の試行的導入

佐賀大学文化教育学部は佐賀県教育委員会との連携・協力事業の一環として、大学院教育実習の試行的導入を 2006 年度から実施している。この制度は学校現場の教育課題の解決策の研究・提示を通して、高度職業専門人として必要な課題発見や解決力を育成しようとする取り組みである。2007 年度には大学院教育学研究科教科教育専攻の学生 1 名がこれに参画し、佐賀県小城市立三日月中学校で教育実習をおこなった。わたしはメンターとしての立場で、かれの教育実習（学習单元「身近な地域をしらべよう」）を援助することができた。これもフィールドワークを中心とした社会科地理の授業の実践例であり、学生の学習成果については詳述したい。

・ 授業全般の共通事項

地理の授業では多様な映像資料がきわめて有効である。わたしはパソコンを用いたプレゼンテーションをほぼすべての講義で活用するとともに、学生にはスライドデータを

資料として配布している（添付資料 6）。また世界各地の映像資料を DVD や VTR に保存することを日頃から心がけている。さらに訪れた世界各地のスライド写真を多用し、経験談を含めた身近な地理の授業となる工夫をおこなっている。これら授業改善が学生による授業評価にどのように反映されているかについては後述したい。

4) 学生による授業評価

ここでは、学生自らがフィールドワークを実施し、それをレポートにまとめることを課題とした 2009 年度前学期の「都市システム論」を事例に「学生による授業評価アンケート」結果を用いて授業を点検し（添付資料 7）、改善策を立てたい。この講義の受講生は 32 名であり、うち 27 名から回答があった。受講生の 8 割以上が 3 年生で占められている。なお添付資料 8 に授業に対する学生の自由記述コメントを載せている。

	5	4	3	2	1	0	平均	偏差	学部 平均	全学 平均
この授業を受講して満足が得られた	5 18.5%	19 70.4%	1 3.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4.160	0.473	3.888	3.660
黒板・ホワイトボード、スライド等の使い方が効果的である	7 25.9%	20 74.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4.259	0.447	3.603	3.500
復習を毎週どの程度していますか	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 18.5%	22 81.5%		1.185	0.396	1.551	1.654

・ 授業の満足度

「この授業を受講して満足がえられた」に関しては 5 人が 5 点を、19 人が 4 点の評価を付けた。平均値は 4.160 であり、学部平均値 3.888 よりも高い。また「この科目を受講してみて、内容への興味が増してきた」に関しても平均値 4.148 を得ており、学部平均値 3.850 よりも高い。これらの評価からわたしの目指していたフィールドワークを中心とする授業内容に関しては、一応の成果が得られたといえよう。

・ 高い評価を得た項目

学部全体の平均値と比較してとりわけ高い評価を得た項目は「黒板・ホワイトボード、スライド等の使い方が効果的である」で、5 点満点の 4.259 点を得た（学部平均は 3.603）。27 人のうち 7 人が 5 点を、残り 20 人が 4 点を付けた。また「教材（テキスト、配布資料、その他）はわかりやすかった」についても高い評価を得た（4.074 : 0.474）。シラバスについても学部平均を大きく上回っており、授業内容及び授業方法に関して全般的に高い評価を得ることができた。これは上述のようにパソコンやスライドデータ、映像資料を多用したことが功を奏していると考えられる。

・ 低い評価を得た項目

学生の出席率がきわめて高いにもかかわらず（25 人が 8 割以上の出席率）、予習および

び復習に関しては学部平均を下回る結果となった。それぞれの平均値は、予習（1.259 : 1.530）、復習（1.185 : 1.551）である。この結果を見る限り、まじめに出席しているものの、予習や復習をおこなわなくても着いていける授業内容であったことが明白である。単に聞くだけでよい授業がなされたことを物語っている。

以上のように「学生による授業評価アンケート」結果に見る限り、授業内容に関しては高い評価を得ているといえるが、学生の授業へのかかわり方をいかに改善するかが課題である。フィールドワークの課題は授業の後半に1度のみ出したが、複数の小規模なフィールドワークを学期中に課すことや、フィールドワークを基にグループごとに課題発見・分析・プレゼンテーションといった一連の授業展開を導入することが必要であることが改めて理解された。

5) 学生の学習成果を示す根拠

ここではわたしの指導学生の学習成果を例示したい。大学院教育実習の試行的導入に関して上述したが、そこで取り上げた井手秀成君の事例が最も参考になると思われる。

井手秀成君は2007年度に佐賀大学教育学研究科教科教育専攻（社会科）に入学し、地理学を志した。将来の夢は地元佐賀県で中学校もしくは高等学校の教員になることである。彼は大学院教育実習を行った翌年の2008年10月に再び実習校（母校）の三日月中学校を訪れ、修士論文「フィールドワークが生徒に及ぼす影響 - 中学校社会科単元「身近な地域を調べよう」を事例に-」のデータを取得するため、フィールドワークの授業実践をおこなった。かれの成果は井手・山下（2009）（添付資料9）に論文という形で公表されている。

当該研究の目的は、フィールドワークを取り入れた学習が生徒たちにどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。この目的に対して、井手君は二つのそれぞれのクラスに対して、学習内容を同一にし、一方はフィールドワークを実施するクラス、もう一方は実施しないクラスを設けて授業を展開した。学習後にそれぞれのクラスの生徒たちの感想文とアンケートからどのような差異がみられるかを比較・分析した。その結果、フィールドワークを実施したクラスの生徒において、1) 地域をみる視点の変化、2) 具体的な地理的見方・考え方の育成、3) さらなる学習意欲の喚起、といったより高い学習効果をもたらすことが判明した。これらの結果を基にフィールドワークが生徒に与えた影響を考察し、今後の地理教育におけるフィールドワークのあり方を検討している。

もう一つの事例はGISに関わるものである。近年ではGISを用いた卒業研究も現れ出した。佐賀県におけるコンビニエンスストアの立地展開を追求した研究、駅周辺におけるバリアフリーの現状をGIS分析した研究がなされ、地域の問題解決に活かそうという姿勢をこれらに読み取ることができる。このような形でフィールドワーク及びGISに関する学生の学習成果が垣間見える。

6) 今後の教育目標

・ 短期的な目標

講義科目の「都市システム論」や「日本の地理と風土」に関して、小規模なフィールドワークを実施し、フィールドワークを実施することの楽しさや意義が学生に浸透するよう、授業改善を進める。加えてにチームティーチングを導入し、講義内容とフィールドワークで得たものを関連づけるような課題を設定し、単位の実質化を図る工夫を行う。

「地理情報システム演習 I・II」に関して、GIS の操作マニュアルを学生との協同作業で作成し、単なる一過性の授業ではなく、卒業・修士論文作成時にも役立つような工夫をおこなう。

・ 長期的な目標

地理学を履修した学生が教育現場や社会で各自の能力を活かせるようなカリキュラム体系の改変をおこなう。現状では、講義、演習、教室での実験・実習、フィールドワークが組み込まれているが、これらを有機的に結びつけるように教育内容の厳選と改変をおこなう。

添付資料 1

地理に対する学生のイメージ

「今まで学んできた地理の授業に関して嫌いな点を自由に記してください」（2008年度前学期の「日本の地理と風土」より）

- ・ グラフや統計の読み取り。
- ・ 世界地図の種類を覚えなければならなかった点（メルカトル図法など）。
- ・ 歴史のように流れ（物語）がないように思えて面白みがわからなかった。
- ・ 気候の名前や種類を覚えるのが嫌だった。
- ・ 地域の特産物を覚えるのが苦手だった。石油や石炭が多く採れる場所や国を覚えきれなかった。歴史のように話の流れがないのであまり好きではなかった。地図を読み取ることが苦手だった。
- ・ 中学校で習った地理は、地名や各国の特色を覚えることばかりで、嫌いではありませんでしたが、好きでもなかったです。また、時差とか日付変更線の問題も苦手でした。地図もたくさん種類があり、どれをいつ使うのか等、全く覚えきれなかったです。
- ・ 自分たちの生活とどのような関係があり、どのように役立つのか少し疑問を持つ。
- ・ とにかく覚えることが多いところ。話を聞いてその地を知ることは楽しいが、覚えるとなると大変だから。特に日本の地理は苦手です。
- ・ 高校の地理の授業では、入試等の関係だと思うけど、世界地誌の授業がほとんどで日本のことはあまり取り扱われなかったので、身近に感じられないことが多かった。商業地・工業地の成立や発展の背景も詳しい説明は省かれていて、イメージしづらかった。
- ・ 世界地理になると多くのカタカナ文字がでてきてややこしい。
- ・ 「一の生産量第1位の国」とか首都など、折角覚えても時代とともに変わってしまう点。
- ・ 高校までは地理は暗記が多いというイメージが強かった。
- ・ 折角覚えても、首都が変わったり（スリランカ）、合併で名称が変わったりすると、とても残念な気持ちになる。
- ・ 国の場所とその国の国教を結びつけて物事を考える点。首都名などを覚える点。
- ・ 地名が覚えられない。
- ・ 国や県名と場所が全く一致しないので、どこらへんが何が盛んだとかがわからない。
- ・ 小5の時、工業地帯・地域を覚えるのがとても苦手だった。なのに何回も何回も授業でやるので嫌だった。
- ・ 歴史のように流れでは覚えられない。ひたすら暗記するしかない、というイメージがある。

- ・ 一番苦手としているのは産業分野です。地図も民族も得意ですが、産業は土地の風土と多少関連はありますが、工業的なものを含めると、どうしても苦手なところが先に出てきてしまいます。「〇〇連合」やら、そのような組織も苦手です。語弊があるかもしれませんが、歴史に比べて地理は一つの大きな流れがないように感じます。ですから、暗記にしても考えるにしてもいくつかのコンテンツに分けて考えなければならぬので、地理に対しては苦手意識をもっています。
- ・ その地域の上位3つの特産物を覚えたりすること。日本史や世界史みたいに、人物について学んだりしないこと。ただ暗記するだけのイメージがあること。
- ・ ある地域の特産品を二つも三つも覚えるのが嫌だ。日本の山の名前や川の名前を覚えるのが苦手だった。
- ・ 地図を見て距離を計算する点。計算が複雑な点。海外に行ったことがないので、日本以外の国のイメージがわからない点。地図記号を覚える・理解する点。聞いたことや見たことのない国やその土地の特徴を覚える点。
- ・ 歴史のように流れがないから覚えるのが大変そう。中学の時、世界の時差を求めるのが面倒だった。
- ・ ある程度勉強したら点数がとれてしまうところ。点数の差が歴史ほどない。努力があまり反映されない。
- ・ 暗記しなければならないことが多かった。製品の生産量などのグラフや表から読み取る問題が面倒だった。
- ・ 暗記中心の授業で面白くなく、興味が全く起こらず、覚えられず、嫌いになった。
- ・ 歴史と違って、学んでいる時に、「その先はどうなるんだろう」というドキドキ感がないところ。単純に暗記だけ、というイメージがあるところ。覚え難いところ。
- ・ 覚えることが勉強していけばいくほど多くなっていく点。地理の中でも地形とかの所が嫌いでした。
- ・ 数値がたくさん出てくるところ。暗記することが多いところ。歴史と比べて授業に流れがないところ。覚えた数値が年々変わるところ。農業、工業、商業など、多岐にわたって学習しなければならなかったので、頭で整理するのが大変だった。
- ・ 結局は地名を覚えなければならないこと。無機質なところ。
- ・ 地理は歴史と違って、地域ごとの何々、その国の輸出、輸入状況等のデータやグラフを扱うので、苦手だった。
- ・ 地図記号とわかり難い地名が出たとき。高校で地理を選択していないため、専門用語に対する不安。複雑な県名と地名。
- ・ 小学校のときに物産品を覚えなければいけなくて、とても難しく思った。都道府県

や県庁所在地をなかなか覚えられない。暗記ものばかりだと思う。

- 地形図から現在と昔を比べて読み取るのが苦手。
- 各国の名前とか似ていて覚えるのが難しい。貧しい国の現状を知る時は辛い。暗記は苦手である。
- 山脈や河川、地域の名称を覚えなれない点。食べ物や産物の産地を覚えたり、気候や降水量、気温などの資料、地図をみて学ばなければならない点。
- 覚えるのが苦手です。世界のことになると、カタカナが増えてごちゃごちゃになる。
- 日本史や世界史と違ってどこを勉強すればよいかわからない点。
- ヨーロッパやアフリカ、中東とかの国名と位置が細かすぎて全然覚えられない。風の名前がいろいろあて嫌いだった。似た名前（国名や地名）が多く嫌いだ。
- 地名や川などが覚え難い。計算問題が結構ある。
- 等高線を使用した地図を使った問題があること。カタカナの地名を覚えること。
- 覚えなければならないことが多く、歴史と比べて地名などとにかく覚えるしかないような単語が多い。
- 地域ごとの気候の違いなど、歴史の人名と比べ、覚えるのが難しいところ。歴史は流れやストーリー性があってわりと楽しく学べるが、地理は淡々と授業が進むだけのような気がする。
- 基本的には地理は好きだが、苦手な分野は地形図です。2万5千分の1、5万分の1地形図は小さくて見づらい。

添付資料 2

地理学フィールドワーク実習の実施一覧

年度	期間	場所	参加学生数（名）
2001	8月2日(木)～8月6日(月)	大分県九重町飯田高原	11名
2002	8月29日(木)～9月1日(日)	大分県九重町飯田高原	12名
2003	前学期の土日4日間	佐賀市中心市街地	7名
2004	8月5日(木)～8月8日(日)	大分県九重町飯田高原	12名
2005	前学期の土日4日間	佐賀市中心市街地	10名
2006	9月17日(日)～9月20日(水)	大分県九重町飯田高原	9名
2007	9月8日(土)～9月11日(火)	佐賀県川副町南川副	5名
2008	9月5日(金)～9月8日(月)	佐賀県神埼市脊振町	12名
2009	9月7日(月)～9月11日(金)	沖縄県渡嘉敷村	8名

2008年度の実習は藤永 豪准教授の「集落実地調査」と合同で実施した。

添付資料 3

沖縄県渡嘉敷島地理学フィールドワーク実習の要項

2009年度 地理学フィールドワーク実習 in 渡嘉敷島（沖縄）

1. 期間

9月7日(月)～9月11日(金)

7日(月) は那覇市内

8日(火)～11日(金) は渡嘉敷島の3泊4日

2. 実習場所

沖縄県那覇市（7日の半日のみ）

渡嘉敷島（国立沖縄青少年交流の家）

3. フィールドワーク内容

首里城、国際通り

渡嘉敷島の集落調査、観光産業の立地、島の自然環境・風土・歴史

予め計画し、グループで予習を行い、現地でプレゼンする。

4. 旅程

全員が以下の日程で行動します。

7日(月)

福岡空港10:00集合（ANAカウンター前）

ANA487便 福岡11:20発 沖縄12:55着

那覇到着後、ホテルに荷物を預け、首里城を見学する。

宿泊：南西観光ホテル

〒900-0013 沖縄県那覇市牧志3丁目13番地23号

TEL. 098-862-7144（代） FAX. 098-862-7110

8日(火)

泊港まで移動。

フェリーけらま 泊港10:00発 渡嘉敷港11:10着

乗り合いバスで移動

国立沖縄青少年交流の家入所

実習（プログラム参照）

宿泊：独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立沖縄青少年交流の家
〒901-3595 沖縄県島尻郡渡嘉敷村字渡嘉敷2760〇
Tel:098-987-2306/Fax:098-987-2318/〇e-mail:okinawa@niye.go.jp

9日(水) 実習(プログラム参照)

10日(木) 実習(プログラム参照)

11日(金) 実習(プログラム参照)

フェリーけらま 渡嘉敷港16:00発 泊港17:10着

泊港→見栄橋駅(徒歩10分)→モノレール→那覇空港

ANA494便 沖縄19:15発 福岡20:50着(確認後解散、家路につく)

5. 費用

パック旅行代：22,600円、生協で事前に支払うこと。

フェリーけらま往復運賃：3,080円(山下で一括手配)

那覇モノレール代：520円～

施設利用料：無料、シーツ代：160円

食事代：1,950円*3日分=5,850円(朝・昼・夕を摂取した場合)

合計：約33,000円～(那覇での夕食代は含まず)

6. 保険

「学生教育研究災害傷害保険」(学生生活課)や大学生協の保険加入。まだの人は必ず
入ること。数百円です。大学の正式な授業であるため、けが等に保険金がでます。

7. 持参品(第2回目のオリエンテーション時に詳細を説明)

必携装備

航空券またはEチケットお金、身分証明書、健康保険証(コピーでも可)、地図、論文
プリント、ノート、スニーカーなどの動き回れる靴、筆記用具、画板(紙挟み、100
円ショップで購入可能)、12色鉛筆、カメラ、雨具、着替え、菓など

滞在基本装備(事前郵送可能)

洗面・入浴用具(タオル・石鹸・シャンプーなど)、体育館シューズ(体育館でスポ
ーツする場合)、雨具・帽子・防虫スプレー・蚊取り線香(野外活動の場合)、サング
ラス、日焼け止めクリーム、懐中電灯(天体観察をする場合)など

注) 9月1日(火) 11:00に大学から青少年交流の家まで荷物を事前に郵送します。身軽な行動
をしたい学生は、山下まで荷物を袋詰めパックして届けること(無料)。

8. 注意

絶対に1人では行動しないこと。

事前に渡嘉敷島の予習をすること。現地のゼミで報告義務あり。

国立沖縄青少年交流の家は共同利用施設です。良識をもって行動すること。朝の集いなど制約あり。

9. 参加者 (計10名、男7名、女3名)

山下、藤永先生 (教員)

秀島華那、吉津美里 (国際文化課程)、李 彗利 (特別聴講生)

井村恒介、小野原友樹、北島吉崇、田中雄基、浜竹勇貴 (人間環境課程)

緊急連絡先

山下 : 0952-22-9903 (自宅)、E-mail:yama@cc.saga-u.ac.jp、携帯不所持

藤永 : 090-6535-7952 (携帯)、E-mail:fujinago@cc.saga-u.ac.jp

大学 : 野瀬さん (地域・生活文化講座事務室) 0952-28-8385

10. 活動プログラム

別紙参照

11. 渡嘉敷島 事前予習項目 (7月中に決定)

渡嘉敷島の自然環境 担当者 (井村 恒介、田中 雄基)

渡嘉敷島の人口変化 担当者 (山下)

渡嘉敷島の文化 (衣食住) 担当者 (小野原 友樹、浜竹 勇貴)

渡嘉敷島の経済産業 担当者 (北島 吉崇)

渡嘉敷島の歴史 担当者 (吉津 美里、秀島 華那、李 彗利)

事前に図書館やWeb等で調べてプリントを作成する。現地のゼミで報告する。

添付資料 4

渡嘉敷村阿波連の土地利用図（2009年）

添付資料 5

都市システム論レポート例（2009年度前学期、3つ）

添付資料 6

学生への配布資料

都市システム論（2009年度前学期に配布したハンドアウト）

添付資料 7

「学生による授業評価アンケート」結果
都市システム論（2009年度前学期）

添付資料 8

授業に対する学生の自由記述コメント（2009年度前学期の「学生による授業評価アンケート」より）

・都市システム論

実際に外に出て、フィールドワークもしてみたいと思いました。

スライドのプリントを配ってくれたことがやりやすかった。

都市の成り立ちなど勉強できて、面白いと思っています。

今まで都市を構造物として観る事はほとんどなかった。都市が様々な要素から成立しているという本講義の内容は大変興味深く感じる。

スライドする時、もうすこし書く時間をください。

・日本の地理と風土

毎回紙に個人の意見を書いて出せるので、思ったことが発表できていいと思う。

レポートを課すことによって都道府県の位置がある程度つかめてよかった。

前に映す時、図や文字が小さくて見え難いときがある。

説明が分かりやすいです。

パワーポイントのスライドの資料を配布してくれるのがとてもありがたいです。授業の内容も興味深かった。

日本以外のことも少し話して欲しい。

地理的見方・考え方が苦手なので、これからできるようになりたいです。

都道府県名のテストは今まであいまいな場所があったのでこの機会に覚えるきっかけとなって良かったです。

高校の時に地理を受けていないので新鮮で面白いです。

中学校の頃使っていた地理の教科書や地図帳を広げて授業を受けるのが楽しい。インターネットで講義で話された扇状地や三角州などを調べ、衛星写真などを見たのがおもしろかった。

高校時は地理は履修していないが、わかりやすく興味を持たせるような授業だと思う。

高校までの地理の授業と違って分かりやすくて興味がわきました。

授業が分かりやすくて良い。

地理が苦手な私にとっては、興味を持てる話題で授業が進められたことで出席意欲がわきました。

スライドが見づらいときがあるので改善してほしい。字が大きくて見やすい。授業内容はとても興味深い。

授業内容をちゃんと理解できているか不安です。地理的見方・考え方は、必ずしもあってもなくても評価はもらえるのでしょうか。

地図を見る時に特徴と空間的分布の違いがよく分からないので教えて下さい。

スライドが見えにくいので前2列分の電気を消してほしいです。

高校では地理をやっていなかったのですが、地理への興味が持てるようになったと思う。

スライドの図が小さくて見えにくい。

一度、都道府県の名前を書くテストのプレテストをして欲しいです。

最終の都道府県名テストをする前に一回模擬テストみたいなのをしてほしいです。

苦手な地理を克服しようと思ってこの授業をとりましたが、先生の教え方がうまく、資料や説明が適切で

とても満足しました。授業内容プラスよい教え方の見本にもさせて頂くことができました。

「方言圏論」や「方言孤立変遷論」などの面白い理論を紹介してもらって、楽しかった。

映像を使った授業がわかりやすかったので、増やしてほしい。

添付資料 9

学生の学習成果（抜刷）

井手秀成・山下宗利 2009. フィールドワークが生徒に及ぼす影響 -中学校社会科学単元「身近な地域を調べよう」を事例に-. 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(1):237-260.